

鬼凧工房 平尾



斉藤あゆみさん

Ayumi Saito

お手本は、祖父が作った鬼凧。
祖父は下絵なしで一氣に描いていましたが、
私は必ず下絵を描きます。
その度に、祖父の偉大さを感じます。
今は、ただただ必死に作っている、それだけです。



仲良くおしゃべりしながら手を動かすあゆみさんとフクヨさん。
その姿は実にほほ笑ましい。

家

内安全、無病息災の魔よけとなる
沓岐島の民芸品「鬼凧」は、
県の伝統的工芸品にも指定されている。

齊藤あゆみさんが鬼凧の職人になる
ことを決意したのは、二年前。きっかけは、
四十五年の間、鬼凧づくりに人生を捧げた祖父・平尾明丈さんの病。
沓岐で生まれ育ったあゆみさんにとって、
祖父と祖母・フクヨさんの隣に座って、
鬼凧づくりを手伝うのは、幼い頃からの日常だったという。大人になり、
福岡県内で就職した後も、休みの度に島へ戻っては二人を手伝っていた。
「ある時、寝たきりになった祖父に工場の鬼凧をすべて片付けてほしいと頼まれました。その言葉を聞いて、

本当にこれがなくなってしまうのかとショックで。祖父母が作ってきた鬼凧を絶やしたくない。祖母もがんばっていることだし、これは私がやるしかない、そう決意しました」。

明丈さん亡き後、あゆみさんは裏山で切ってきた竹を削って骨組みを作っては、和紙に下絵を描いて色を塗り続けていく。「祖父のようにはいきません」と笑いながらも、三メートル以上の大きなものも手掛けるようになった。

住まいも沓岐に移した。見渡す限り田園風景が広がるこの場所で、あゆみさんは日々、フクヨさんと朝から晩まで鬼凧づくりに励んでいる。「島には若い人が少ないんです。だから私は『沓

岐＝鬼凧』と思ってもらえるように、がんばりたい」と、彼女の言葉はどこまでも力強い。

そんなあゆみさんを見ながらフクヨさんは「竹の削り方や骨組みの作り方なんか、やっぱりおじいちゃんの血を引いているな」と思い、頼もしいです。私は今が一番、幸せです」としみじみ語ってくれた。

沓岐には初節句やお祝いの際に鬼凧を贈る風習があるという。「地元の人から『鬼凧を残してくれて、ありがとう』と言葉をいただくこともあります」と話すあゆみさん。島の人々にとっても、彼女の決断は大きな喜びとなっている。



祖父からのバトンを握りしめ、島の宝を守り抜く。

